

信仰と云うこと

——親鸞における信の性格について——

信 樂 峻 磨

一 序 説

信じると云う言葉が宗教的な意味において用いられる時、即ち神や佛を信じると言う場合には、普通信仰と熟字されて語られることが多い。佛教、神道、キリスト教何れの宗教においても、一般的にはその信體驗をさして信仰と呼んでいるのである。

そして親鸞教學においてもまたその信について語る場合、多くはそれを信仰と言っている。しかしながら、親鸞自身はその信體驗を表現するについて一度も信仰とは言わなかった。そのことは親鸞の時代に信仰と言う語がなかったからではない。後に指摘するように、その當時には佛教的にも世俗的にも信仰と言う語はしばしば用いられていたのである。にもかかわらず親鸞はその信體驗について明かす場合、ただの一度も信仰と言う語を用いないで、それを信、信心、信樂な

どと呼んでいるのである。しかるに我々は今日親鸞における信について語る場合、多くは信仰と言う語をもつてし、またその信心、信樂などと言われる語と、信仰の語とを殆んど混同したままで用いているのである。だがそのことは果して認められることなのであるか。親鸞における信の研究の一齣として、この信仰と言う語をめぐつて若干の考察を試みることにする。

二 信仰の語義

信仰とは信と仰との熟語である。そして信とは人と言との合字であつて元來は人の言葉のことであるが、人の言葉は心中を表白するもので偽りなきものと言うところから、信は誠を意味することとなり、またそれが轉じて、その言葉を誠とするの意として信じると言う語が生れたと言う。従つて信には、まこと、まこととする、あきらかにする、しる、したが

う、うやまう、などの意があるのである。また仰とは人と叩からできた字であつて、叩とは「も」も共に人を表わし、「と」は左に人が高く位置し、「叩」は右に人が低く位置して向いあつてゐること、即ち右の人が左の人を高く望むと言ふことを表わすものである。従つて仰の字は、見上げる、頼む、慕う、などの意味を表わしてゐるのである。

このことからして、この信と仰の字を熟することによつて生れた信仰と言ふ語は、信じ仰ぐと訓まれるべきで、それは何等かの対象に對し、それを高く見上げ、仰ぎ見ると言ふ態度において、その対象を誠とし、審らかにし、敬い従うと言ふことを意味する言葉である。即ち信仰とはその語義からすれば、高き存在としての何等かの対象に向つて、ひたすらに心を傾け、それに歸すると言ふ、對象的志向的な歸依信伏の心的作用を表わすものと言ひるのである。

三 佛教における信仰

この信仰と言ふ語は佛教においても古くから用いられてゐるものである。管見によると、すでに唐譯『華嚴經』卷第一四賢首品にそれを見ることができるのである。即ち

「一切の仙人の殊勝の行を人天等の類は同じく信仰す」(大正一〇の七五a)

と説かれてゐるものがそれである。この信仰の語についてそ

信仰と言ふこと(信 樂)

の原語は不詳であるが、晋譯の『華嚴經』を参照するとそこでは「愛樂」(大正九の四三五c)と譯されてゐるのであつて、このことからすればこゝで言ふ信仰とは、その語義の如くに、仙人の殊勝の行に對して、ひとすじに心を傾けそれに歸向し信伏することを意味するものであると思われる。

そしてまた『續高僧傳』卷第二二にも、

「道に沙門を見れば尋ねて返ることを忘る、親その信仰を欣び遂に放ちて榮法師に依つて出家す」(大正五〇の六一五a)

と記されてゐる。こゝで言ふ信仰の語も、また單に沙門に對していちずに心を傾倒し、それに歸伏することを表わしてゐるものである。

その他、源信の『往生要集』卷下末には、

「淺近の世法すら猶思議すること難し、いかに況んや出世の甚深の因果をや、唯まさに信仰すべし疑念すべからず」(眞聖全一の九一三)

と言つてゐるが、ここにおいても信仰の語は、前のそれと同様に、いちずな歸向信伏の心を意味するものであらう。

また法然は、

「佛弟子信仰の者と雖も五逆十惡破戒の者の往生においては、また之を信ぜざる故に此の證誠有り」(漢語燈錄・眞聖全四の三七〇)

「かくのごときの彌陀のちかひに信をいたさざらむ人はまた他の

法文をも信仰するにおよばず」（西方指南抄・同四の二三）

と云い、道元もまた『正法眼藏』に、

「微和尚の觀機あきらかなること信仰すべし」（卷七五・文庫本下の五〇）

「龍樹菩薩の慈誨ふかく信仰したてまつり頂戴したてまつるべし」（卷八九・同下の二〇四）

と述べ、また日蓮も、

「汝早く信仰の寸心を改めて速やかに實乗の一善に歸せよ」（立

正安國論・昭和遺文全集上の四一一）

「法華經をだにも信仰したる行者ならば捨て給ふべからず」（開目抄・同上の七九一）

などと示しているのである。⁽³⁾そしてこれら法然、道元、日蓮における信仰もまた、何れも經典や教法などに對し、それを恭敬しそれに歸伏することを意味するものであつて、前のそれと同様な性格をもつたものである。

かくして佛教においても、信仰と言う語が多く用いられていることを知りうるのであるが、その信仰とは、人や教法など客觀的な對象に對していちずに心を傾けると言ひ、志向的、能動的な歸向信伏の心的態度をあらわすものである。そして元來佛教における信については、大別して「佛法の大海には信をもつて能入となす」（大智度論）などと説かれる如き、佛道趣入の初門の意味をもつた現前忍許、無疑信認としての信

と、「信心清淨なれば華開けて則ち佛を見る」（十住毘婆沙論）などと明かされる如き、忍許信認としての信を因として、それを次第に智にまで高めてゆくことによつて生れる、心清淨としての究竟的な意味をもつた信とがあるのであるが、今の信仰とはその前者に相當するものであつて、佛教における信仰と言う用例は、直ちに第一義的究竟的な意味での信を表わすものでないことは注意すべきである。

四、日本古典における信仰

そしてまたこの信仰と言う語は、佛教の文獻のみにとどまらず、我が國の平安、鎌倉時代の古典の中にもしばしば見られるものであつて、親鸞の時代にはすでに一般化されていた言葉であると考えられる。例えば『玉葉』の中にはそれを多く見ることができるのであるが、今その二三を挙げると、

「念佛十四萬遍今且指掌の吉夢有り信仰すべきものなり」（卷三七）

「奇端等有るの由を談す佛法の驗は尤にして信仰すべきか」（卷六〇）

「餘の深く信仰し奉る春日大明神及び南圓堂の不空絹索觀音」（卷六二）

などの用例がある。また『古今著聞集』には、

「この示現聞きていかばかりいよいよ信仰の心もふかかりけん」

(卷一)

「その泡かうばしき事かぎりなしその時上人信仰して」(卷二)
などと述べ、また『徒然草』には、

「西園寺内大臣殿あなたふとのけしきやと信仰のきそくありければ」(第一五二段)

と言ひ、また『大平記』には、

「悉く信仰の首を地に著けて隨喜の涙を袖に餘す」(卷二四)

「一時の奇特ここに顯われて萬人の信仰御斜ならず」(卷二四)
などとも明かしているのである。

そしてこれらの用例から見ると、古典において用いられている信仰と言う語は、その殆んどがさまざまな奇瑞、靈驗、靈夢などの不可思議な現象に對して、それを無條件に承認しそれを誠とすると言う、全く非合理的な信伏を意味しているのである。しかしまた他面には前引の『玉葉』卷六二の用例の如く、純然と神佛に對する歸依を意味するものや、あるいはまた『徒然草』の用例の如く、單に人間に對する歸伏を意味する場合も見られるのである。だが、これら古典の上において用いられている信仰とは、概して靈驗、奇瑞などの不可思議な現象に對する非合理的な歸向信伏の心情を意味しているのであつて、それは今日一般に用いられている如き、神佛に對する信體驗を意味する信仰とは、同じ信仰と言ひながらも、いささかその意味内容を異にしていると云わねばならな

信仰と言うこと(信樂)

いようである。

五 現代語としての信仰

このように信仰と言う語は、佛教においても、また古典においても、相當古くから用いられていたことが知られるのであるが、現在一般に用いられている現代語としての信仰と言う言葉は、かかる古語としての信仰とは一應別なものであつて、それは明治時代に新しく造られたものか、あるいはまたその古語に基づいて選ばれたところの、全く新しい言葉のようである。即ちこの現代語としての信仰とは、明治時代にキリスト教の聖書を日本語に翻譯する時、その原典におけるギリシヤ語の πίστις (pistis) を譯すについて、信仰と言う語を用いたことに始まつたものと言われているのである。この πίστις とは、元來人間が人間を信じると言うことを含めて極めて廣義の信賴を意味するもので、それ自身としては直ちに高きを仰ぐと言う信仰の意味はもつてはいないのである。しかしながらキリスト教における神とは「いと高きもの」(ルカ一三五)であり「天にいますわれらの父」(マタイ六九)であつて、それは常に遙かなる天にまします存在として語られているのである。その故にキリスト教において神を信じると言うことは、必然的に天を望み、高きを仰ぐと言うことでもあるわけである。即ちキリスト教における神への信

は、どこまでも信じ仰ぐと言ふ意味内容をもつているのである。それはまさしく信仰と呼ばれるべきものなのである。かくして本來的には單なる信賴を意味するところの *placis* が、信仰と譯されたことはまことに妥當な譯であると言ふことができるのである。そしてこのような事情によつて成立した信仰の語が、當時の歐米文化模倣の思潮の中で次第に一般化されることになり、ここに現代語としての信仰と言ふ語が、誕生し普及したものと考えられるのである。

かくして今日用いられている現代語としての信仰と言ふ言葉は、その語義からしても、またそれが現代語として誕生し、一般化されるに至つた事情からしても、それは高きものに對する志向的能動的な信を意味するものであつて、キリスト敎など、信の對象としての究極なるものを、いと高き存在として把握している宗教においては、まことにふさわしい用語であると言ひうるであらう。

六、親鸞における信の性格

しかしながら親鸞において信じると言ふことは、單に高きところのものを信じ仰ぐと言ふ如き志向的能動的な信ではないのである。親鸞にあつては、佛とは單に遠く距つていと高きところにましますと言ふようなものではない。それは「從如來生」（證卷・眞聖全二の一〇三）として、常にこの現實に

向つて到來しつゝあるものであり、「微塵世界にみちみちてまします」（唯信鈔文意・眞聖全二の六三〇）ものなのである。従つてそこでは佛を信じると言つても、それは仰ぐと表現されるべきものではないのである。

そしてまたその信の性格についても、詳細な考察は別論にゆずらなければならないが、今その要點を見るに『信卷』の三心釋によれば、親鸞は信について明かすに、信心とは單に衆生の佛に對する志向的な信と言ふことではなく、それはまた佛自身の信心でもあつて、その佛の信心を廻施されそれを領受することによつてこそ、衆生の信心が成立すると言ふのである。親鸞において信心が「如來よりたまはりたる信心」（歎異抄・眞聖全二の七九二）と語られる所以である。しかもまたその信とは「二種深信」の釋が示す如く、私自身の現實の相を深く信知することであると同時に、また私に對する佛の願力について深く信知することでもあつて、私について信じると言ふ機の深信と、佛について信じると言ふ法の深信の二種が一具として成立するところ、ここに信があると言ふのである。このように親鸞における信とは、佛より廻施されたものであり、またそれが自己自身を信知することを通して成立するものであると言ふことからすれば、その信とは單に私から佛へと言ふ志向的な信ではないのであつて、信じ仰ぐと表現されるべきものでないであらう。そしてまた親鸞にお

ける信とは、「信心の智慧」(正像末和讃・眞聖全二の五二〇)「信する心のいであるは智慧のおこると知るべし」(草稿本正像末和讃・親鸞全集一四五)などとも語られている如く、それは「不合理なるが故に我信す」と言う如き反知性的な歸投憑依の心情ではなくて、どこまでも知性の働きに即するところの信なのである。即ちさきに指摘した如く佛教における信には、初門としての前提的な意味をもつたものと、それに基づいて成立してゆくところの究竟的な意味をもつたものとがあるが、親鸞における信とはまさしくはその後者に相當するものなのである。従つて親鸞における信とは、單に佛と私との主客對立の關係において、私が佛に對して志向的に歸依歸向すると言うことではなく、むしろそう言う主客對立の分別を離れたところに成立するものであつて、かかる分別を泯亡して、自己が直ちに自己自身の相を根源的に自覺することにより、そこに同時に佛の大悲を如實に領解すると言う、全く主體的な自覺領解の體驗であり、自己の姿と佛の到來とをそれ自身としてまさしく知ると言う、眞の智慧の獲得を意味するものであつて、それは決して信じ仰ぐと表現される如きものではないのである。

かくして親鸞における信については、それを信仰と呼ぶことはいささか不相應であると言わねばならないようである。そして親鸞における信について語られる場合には、その信仰

と言う言葉のもつ語義からしても、またかつて親鸞自身がその語を一度も用いなかつたことからしても、更にはまたそれが現代語として新しく誕生した事情からしても、それを直ちに信仰と表現することはふさわしくないものであつて、その信心乃至信樂と信仰とは一應區別して語られるべきであると思われるのである。

- 1 大漢和辭典 諸橋轍次 一の七九八
- 2 漢字の語源研究 藤堂明保 四二九頁
- 3 大漢和辭典 一の六二二
- 4 この原語は *adhimukta* と推定されている「原始佛教における信の形態」(北海道大學文學部紀要六) 藤田宏達
- 5 日蓮における信仰の用例は多い。
- 6 信仰の用例はその他にも見られるが省略した。
- 7 哲學小論集「文化と宗教」 川田熊太郎 一二〇頁

小出有三氏(本學會理事・愛知學院大學學長)

は昭和四十年三月二十九日肝臓ガンのため死去された。享年七十二歳。